

連載へまつやま 人・彩時記⑧
紙の里「新場所」に生まれた

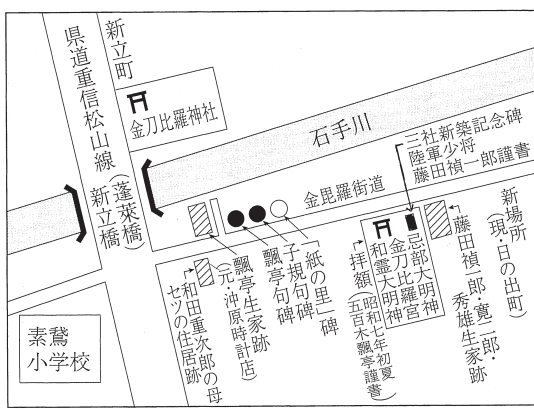
俳人・ジャーナリスト・國士
五百木 飄亭

元松山市立素鷲小学校校長
伊予史談会会員
上岡 治郎

一、子規・飄亭の句碑建立

藩政時代から明治・大正時代にかけて、現在の日の出町を「新場所」と呼び、町に住む多くの人々が石手川の水を利用しての手漉和紙の生産に従事していたので、現在もその思い出を持つ人は多い。

そのため町内会連合会長の越智政隆氏が建立委員長、公民館日の出町分館主事の沖原光雄氏が庶務会計となって町内有志と相談し、寄附金を募ることにした。



「俳句の里松山」城南コース①番
所在・松山市日の出町（石手川公園）

「飄亭 五百木良三 顕彰碑」の前で
左藤田忠寛 右妻 禮子 中石工 川井喜代一



右「紙の里」の碑
左正岡子規の句碑

寄附金は順調に集まり町内会で約210万円、五百木家親戚一同で70万円となったので、石手川土手の遊園地内に、「紙の里」の碑と子規・飄亭の句碑2基を建立した。（除幕式は昭和57・11・28）
新場所や紙つきやめばなく水鶏（子規）そぞろ来て橋あちこちと夏の月（飄亭）

この子規の句の選定については、子規記念博物館長和田茂樹先生のご指導による。また、飄亭の句については、親戚筋に当たる藤田家一族がその保管している色紙より選定したものである。
ところで五百木飄亭の句碑は、正面に前記俳句が刻まれ、裏面はその顕彰碑となっている。

飄亭 五百木良三 顕彰碑

五百木先生名は良三 飄亭 犬骨坊 白雲の號あり 明治三年十二月十四日伊豫松山日の出町に生る俳聖正岡子規等と共に明治俳句界の先覚者たりしが 後 近衛篤磨公の知遇を得て終生国事に盡瘁す 昭和十二年六月十四日歿 享年六十八（撰文 藤田忠寛・書妻 禮子）

二、回想の五百木飄亭

私は素鷲小6年の時、一度だけ飄亭の生まれた家に行ったことがある。

ところでこの数年、五百木家と親戚の藤田忠寛氏と文通するようになって、郷土の偉人「五百木飄亭研究」は更に進展した。

特に私の一家が住んでいたお宮の隣りの家は、忠寛氏の父寛二郎氏の生家であり、祖父藤田榮次氏が製紙業を営んだ「紙の里」の原点とも言える場所であった。

①藤田禎一郎氏（従兄）の文章

「私と彼（飄亭）とは血縁において彼は私の従弟、即ち私の父の兄の独息子にして明治三年、私は同二



飄亭が書いた二つの額
（上）拝殿入口 （下）拝殿の中

年、共に松山市外の俗称新場所（今の日の出町）なる紙の里に生れた。それから十八歳頃、私は陸軍に、彼は医者を目指して共に松山を離れた。……幼年時代、故ありて数年、彼は私の両親の慈愛ある膝下に……実の兄弟の如く養はれた。
明治十五、六年頃から松山市千舟町に在りし儒者河東坤先生（故碧梧桐氏の父上）の塾に、我等二人ここでも揃って入塾し、師の厚き指導を受けた。

②藤田寛二郎氏（従弟）の文章

「……幼少の頃より天才のひらめきを見せ、いわゆる村の麒麟児であった。いずれの方面に進んでも一家の大をなす人であろうとは、当時村人が噂した所である。
十五、六歳の時、出生地の村役場より役場の看板の揮毫を依頼して来た。翁（飄亭）は直に筆を取って大書されたが、書風の雄健、人物の凡庸ならざるを思はしめて、村人はただ驚嘆するばかりであった。……」



明治男の典型・五百木良三
(号)飄亭・犬骨坊・白雲

三、医師の国家試験に合格

飄亭は漢学塾千舟学舎に入塾する以前から松山の県立医学学校に通っていたので、入塾後はそこから医学学校に通学し、医師の前期試験に合格したのである。

そして大阪に出て小野田医師の医務を手伝いながら勉強し、わずか19歳で後期の試験に合格し医師開業の免状を取得したのである。

しかし未成年者であるため開業の出来る年齢まで、東京に出てドイツ語の勉強をすることにし、久松家の常盤会寄宿舎に入舎し、新海非風と同室となる。

四、子規・非風・飄亭の交流

飄亭は非風に誘われて子規の下宿に行き、初めて子規に会い意気投合する。そして子規が寄宿舎に再入室してからは、三人同宿となり、俳句研究に、小説創作にと更に交わりを深めて行く。

そして明治23年12月、飄亭は近衛歩兵に、非風は砲兵に入隊するも、二人は休日ごとに子規をたずねて三人で句作にふけるのであった。そしてせり吟や何々12か月、1

題100句などを試み新しい俳句の基礎を築いて行ったのである。

五、「小日本」入社と従軍

「作るから上達する、上達するから面白くてたまらなくなる」と子規に賞められた飄亭は、子規が新聞「小日本」の編集主任になったのを機会に、「小日本」の記者として子規を助けることになったが、明治27年8月1日に日清戦争がはじまったため、看護長として従軍する。

そして子規に勧められて、犬骨坊の筆名で「従軍日記」を新聞「日本」に寄せ、文章の中に俳句を入れたことが好評で文名を高める。

子規が病気を患って従軍記者となり死線をさまよったのも、飄亭に刺激されたためとも言われる。

〈子規・飄亭の俳句とその前書き〉

飄亭六軍に従ひて遼東の野に戦ふこと一年、命を砲煙弾雨の間に全うして帰る。われはた神戸須磨に病みて、絶えなんとする玉の緒危くもここに繋ぎとめつひに逢ふ事を得たり、相見て茫然言ひ出づべき言葉も知らず

秋風や生きてあひ見る汝と我（子規）
計らざりき君この秋を生きんとは（飄亭）

これは、子規が小康を得て松山に帰る途中、広島に滞在中の飄亭を尋ねた時のもので、前書き数行にも、俳句にも、生きて再会できた喜びが感動的に表現されていて、読む者の胸を打つ。

六、新聞記者から国士へ

明治28年12月末に東京に帰った飄亭は、子規の協力などもあって「日本」新聞社に正式に入社する。

そして、貴族院担当の新聞記者として健筆をふるっているうちに、文学から次第に政治へと関心が移る。特に同院議長になった近衛篤磨の知遇を得てからは、その幕下に参じ次第にその片腕となる。

最初に近衛の雑誌「東洋」を主宰し、「日本」新聞社を近衛が受け継いでからは、再び「日本」に復帰してその編集長となる。

ところが、日露風雲急を告げる明治37年1月に近衛篤磨が病死してからは、盟主を失った悲しみに耐え、浪人となって「城南荘」にこもり、近衛の遺志を奉じて国事に奔走する。

そして昭和4年以後は政教社を主宰し、雑誌「日本及日本人」を刊行しながら、盟主近衛篤磨の息、近衛文麿の成長を願い、近衛内閣誕生を陰から支える。

そして昭和12年6月、遂に第一次近衛内閣が誕生し、飄亭多年の夢が実現したのである。

春以来病床にあった飄亭が、6月8日に新首相に贈った祝句

五月晴の不二の如くにあらせられ（飄亭）

なお、近衛首相が飄亭を見舞ったのは6月11日、飄亭が亡くなったのは、その三日後の6月14日である。

昭和11.6.12 朝刊の大阪朝日新聞



五百木翁を見舞う近衛首相

病める『父の盟友』に贈る『宰相の慰め』
路地奥の老志士、五百木翁の枕頭を訪ふ紋服姿

あった。

七、「飄亭句日記」より抜粋

○大正十五年六月十二日 驟雨雷鳴（入梅） 郷里なる叔父（※藤田榮次、危篤の報に接し今夕出発）
○十三日 夜、雨中高浜に着、直に松山なる叔父の許に急ぐ、一足違ひにて臨終に接し遺憾多し
五月雨やはやくと切れて逆屏風
○十四日

明け近き鼻聞きつつ通夜つかれ

○十五日 道後義安寺に埋骨

とことには涼しき山よ眠りませ

飄亭は大正8年から「句日記」を書いており、柳原極堂が昭和4年に創刊した俳誌「雞頭」にその句日記を連載している。

句碑になった「そぞろ来て…」の句は、飄亭が罹松した6月17日に「新立橋」を詠んだ句で、叔父のことや幼少時代のことを思い出している句であろう。

○なお飄亭は、昭和十一年九月十九日の「子規二十五年忌」には、子規を偲んで次の句を詠んでいる。

世にあれば古稀の子規なり月の秋（飄亭）